

保 育 奉 公

大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

明治天皇御製

子

いはけなく遊ぶ子どもをさまみればわれもをさなくなるこゝちして

ほんまうに子どもらしく、一心に遊び入つてゐる子どもをみるに、われもひかされて幼くなる。畏くも偉いなるみかきの、かう詠ぜされてあるのである。

そうまでも眞純な子どもの生活は貴い。眞純でなくて、かうも大きい力を持ちやうはないのである。その前には、一切の複雑迂曲を捨拂せられて、ありのままへ歸らされ、すなをへ立ち戻らされずになる。位をも忘れ、賢さをも忘れ、身のおこなたることをさへ忘れて、子どもごころになりきるのである。

その時、子どもも亦、おきなの中に眞純を見出し、心から遊びもし語りもするであらう。教へられるよりも前に、導かれるよりも前に、それがどんなに子どもに嬉しいことであらうか。眞實は眞實をのみ求めるからである。

教へるよりも遊ばせることの方がむづかしい。遊ばせるよりも共に遊ぶことの方がむづかしい。共に遊ぶ前に、眞に遊ばせられることこそむづかしい。

それにしても、子どもの前に子どもになれるためには、先づ子どもごころをもつてゐるのだからなければなるまい。子どもの眞純が貴いと共に、その子どもごころを失はずにゐるおきなも尙ほ貴い。語に「大人者不失其赤子之心者也」(孟子)とある。

まことに畏れ多い申しようではあるが、大帝の御前に、子どもらは如何に心からなつき親しみ奉ることであらうと、謹誦にそへて思ひまいらせざるにあらぬ。